

さまざまな季節に さだまし



さまざまな季節に

さだまさし

文藝春秋

著者略歴

昭和27年長崎市生まれ。3歳からクラシック・バイオリンを学び、13歳でバイオリン修業のため上京。47年国学院大学法学部を中退して帰郷。同年フォーク・デュオ「グレープ」を結成。49年「精霊流し」でレコード大賞作詞賞。51年グレープを解散、ソロ歌手となる。52年「雨やどり」他で二度目のレコード大賞作詞賞を獲得。著書に「本——人の縁とは不思議なもので」「帰去来」「時のほとりで」など。

さまざまな季節に

定価 980円

1981年11月15日第1刷

著者 さだまさし

発行者 半藤一利

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23

電話 03-265-1211 (代)

印刷 凸版印刷

製本 加藤製本

© Masashi Sada 1981 Printed in Japan

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

■ 目次 ■

I

歓迎「春」御一行様	8
春告鳥	12
遠くへ行きたい!	17
江戸の仇は長崎で	21
静岡県奥大井寸又峽にて	24
皐月抄	27
螢祭り	32
あぎやかな秋	37
親子路——山寺にて——	40
くしゃみ考	49
あけましておめでとうございます	54
《コンサート・メッセージ》	
舞台の魔力	59
○・一秒の短縮	61

Ⅱ

- 伯母のこと 64
邪馬臺の風に寄す 74
邪馬臺の風 80

《コンサート・メッセージ》

- 何故三十歳以上なのか 93

Ⅲ

- 初夢考 98
一夜のために流す汗 103
我が相棒達の記 108
義仲と白鳥座 112
歯医者と地球防衛についての一考察 118
不必要な祭り 123
あけましておめでとうございます 126
つれづれなるままに 129

中国ボケ!? 132

《コンサート・メッセージ》
「お疲れさん」 137

IV

泣いた赤鬼 142

出雲路 156

青春のかげりの中で 191

同人誌 206

珍さんの薬 232

あとがき 251

カバ | 写真 装幀
森田研作 安彦勝博

さまざまに季節に

I

歡迎「春」御一行様

最初に何を言おうかと、この処ればかり考えていました。つまり、とうとう正式に、「まさしんぐWORLD」などという変な名前の会が発足してしまっただからです。

それというのも、たかが若僧一匹が、生意気にも自分の事務所などというのを開いて、皆に世話になっているにもかかわらず、何でもやってみようという好奇心ばかりが先行して、小冊子まで作ってみたり。そうこうするうちにとうとう今日が来てしまつて、結局は、ありきたりの「ありがとう」を並べるしか能が無かつたなんて……。

でも本当にありがとう。お蔭で何となく、僕達も張切つてやれる状況がやってきました。発足の時点で二千名を越す会員数には、びっくりするやらありがたいやらで、編集長の山口保共々、皆さんに感謝しています。

そんな訳で、こうして、一頁を頂戴して、これから毎号毎号つらつらと何やら思うままに書きつづつて行こうと思っています。題して「まさし徒然草」、一寸ばかり気取り風に一寸ばかり偉

そうに、一寸ばかりおかし氣にあれこれ見てみましょうか……。

今年は、九州の太宰府天満宮の一〇七五年大祭に当たります。

つまり菅公（菅原道真公）の没後一〇七五年目にあたる年なのです。僕も今年は初詣でを兼ねて参拝する機会に恵まれ、また、その後も一度重ねて参拝しましたので何となく、太宰府通になつたみたいです。というのも、この宮司さんに国学院大学の大先輩である小鳥居さんという方がおられて、二度目には、この方と二時間程お話する機会があったからです。太宰府天満宮の宮司さんは、昔から代々世襲制で、現在でも、西高辻家と小鳥居家でもって守っておられる訳です。世襲制というのは、大きな神社に限らずともそういう形をとっている所は多いのですが、この天

満宮は、何と菅原道真公の直系の子孫である両家が継いでおられる訳で、ざっと数えて四十代目というのですから、氣の遠くなる程の歴史を抱いているのです。さて太宰府の小鳥居さんは、先輩といつても大が三つ位つく程の大先輩ですが、実に優しい人でありまして、菅公のお話をうかがえたばかりでなく、天満宮裏にある「お石茶屋」でご馳走までしてもらいました。一月の末頃行つたのですがさすがに学問の神様、受験生やその親御さん方の姿が、平日なのにちらほら。天満宮にある赤い太鼓橋が過去、現在、未来という三つの意味を持つ事も知りました。そして、菅公が如何に大天才だったかという多くの逸話も聴くことが出来たのです。五歳の時に歌を詠んだり、異例のスピード出世をしたり。

結局は、その才覚が、時の権力者の反感を買って、ある罪で九州に流されてしまった事。少年の頃から梅の木が好きで、流される時に、愛する梅の木に詠んだ絶唱。

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花 主なしとて春な忘れそ

その呼びかけに應えて、菅公が亡くなったその晩、一夜のうちに京から太宰府へ飛んで来てしまったという感動的な「飛梅」伝説。小鳥居さんは、歴史を語り出すと、一晚やそこらじゃ足りない位ですよと笑っておられたけれど、僕には十分過ぎる程の二時間でした。そこで、家に帰って、その感動を一気に絵にしてみましたのが「飛梅」という歌なのです。この他にもその昔、一大文化都市だった太宰府（小鳥居さんのお話では、昔は、太とかかず大と書いたのだそうです）には、観世音寺という古いお寺や、学校の跡、それから、都府楼なんて地名は、それはもうロマンチックで泣けてしまう。皆さんも、機会があったなら、ひょっとすると、幻の邪馬臺国は此処であつたかも知れないこの太宰府へ足を伸ばしてみて下さい。その節は小鳥居大先輩にはどうぞ宜しく……。もう、社殿上手前に在る「飛梅」は花咲いている頃でしょう。もう「春」の皆さんは、そこに来ているのです。そして、僕の故郷の長崎は恒例の黄砂現象で幕を開けるのです。

黄砂現象——春先の長崎は、日によって、街中が黄色に煙って見える時があります。それこそ、東京のスモッグが、いっせいに黄色くなったと思えばよろしい。街中が淡い黄色に染まってしまう。季節風に乗った中国の黄土が、細かい粒子になって飛来するのです。

「飛梅」ほど感動的ではないかも知れませんが、遠い中国から風にのって、毎年黄色い風が春を告げにやって来るなどというのは、又、ロマンチックですが、主婦にとっては、そう、ロマンチックでも何でもない、つまり、いくら拭いても細かい粒子だから、埃っぽくて仕方が無いからです。それに喘息の人にとっては、大変です。それでなくとも、敏感な人は、春先の花の花粉にす

ら、気管支をやられてしまう程ですから。

そういった事を棚上げすれば、漠然と、こんな、魅力的な長崎は少ないと言えましょう。それが過ぎると、いよいよ、飢上げです。ここまで来たら、春の奴等は大きな顔でのさばって、丁度コンサートが終わった後の食事の時の「サーカス」の連中みたいな、大騒ぎを始めるのです。

そうです、春、御一行様は、もう僕等の玄関先に居るではありませんか！

注 現在のさだまさしのバックバンド（ふりーばるくん）の旧名。昭和五十四年、同名のコーラス・グループの出現により改名。元祖「サーカス」は、さだまさしのバックバンドなのです。

春告鳥

市川の家には、ささやかだけれども庭があります。十坪弱の庭は、前の住人が良かったのか大家さんが偉いのかは知らないが、かなり趣のある造りになっている。ここへ来た時分にはまだ池に水が張ってあったのですが、お袋がこれを余り好まなかった。何故かというと、水を張れば夏にはぼうぶらが湧く、それが嫌だからと魚を飼う、するといつか生き物は死ぬ、即ち悲しいからいやだわと、水を抜いて、砂利を入れ、何やら枯山水まがいの庭に造り変えてしまいました。この池のほとりに幾本もの樹が植えてあって、ここに小さな小さな道が一本踏んであります。長さにしてもほんの5、6メートル程度の山道ですが、掃除をしながらこの中に入ると、まるで雑木林の散歩道に居る様な不思議な心もちになってしまう。

門の脇に古い梅の木が一本あって、白梅です。これに春になると鶯が来ます。実家の長崎の方では、自分の家の庭で鶯が鳴く様なことは考えられないから、我が家の連中は皆、大変驚きました。三年程前に、つまり、此処へ越して来た翌年の春に、お袋が発見しました。もうその時は大

騒ぎで、お袋は、鶯が鶯が、とUFOでも観た様なはしゃぎようでした。で、その時にお袋が、「鶯の子供が庭に来る」という。「子供」というのがひっかかって、どうして子供なのか、とたずねると、ホーホケキョが言えないから、というので大笑いしました。じゃあどう鳴くのか、という、ケキョ、ケキョ、しか言わないらしい。

来るのは明け方頃だから、と聞いて、僕も徹夜ついでに待っていると、確かにやって来て、ケキョ、コキョ、としか鳴かない。大きな音をたてると驚いて、二度と来なくなるといけないから、笑いを殺すのに必死で、こめかみが痛くなった程でした。可愛かった。それがその次の年になると、成長したらしいが、まだ真打じゃなくなって、二つ目位の鳴き声、「ホー」と鳴いて、多分、プレスをしてからでしょうか、「コケツキョ」という。舌っ足らずが、何とも愛らしいのです。お袋はそれでも、去年より上手うまくなっている、きっと練習をして来たのだろうと妙な感心の仕方喜びました。

処で、一体この鶯は本当に去年の奴だろうか、だとすると、夏から冬は何処へ行っているのだろうと、我が家でもめました。鳥に詳しい建具屋の加藤さんの話では、鶯は、縄張り争いにけじめがうるさいから、多分、去年と同じ奴だろう。この辺りに鶯が住む山は筑波山か富士山だろうから、きっとそこから通って来る、ということになって、再びもめました。では何故、市川まで来る必要があるのか、と。結局良く判らずいいになっています。その鶯は、現在は成長して、極めて、鶯らしい鳴き方をする様です。

家の廻りに自然の生き物が居るというのは大変すばらしいのですが、もう都会では、ドブネズ

ミヤゴキブリ程度で、近頃は雀すら見かけない様でとても切ない。市川は割合縁が多いので、鳥や虫が結構多く見られます。前に住んでいたアパートは下総国分寺の裏だったから、時折ふくろうがやって来て、近くでホーウ、ホーウと鳴いたりしました。ヤモリというのはかなりあの形で嫌われている様ですが、害虫ではない。昔のアパートには子連れの夫婦ヤモリが居て、時折居住者の女性を驚かせていました。この夫婦に与太郎ときよ子サン、子供に世之介という名前をつけて、僕は喜んでいました。ヤモリは一夫一婦制だそうで、とても偉い奴だと感心したりもしました。

先日、北海道の富良野という所へ行きました。松山千春の家へ行く途中、千春が慕っている作家の倉本聰さんのお宅へうかがったのです。富良野は北海道のヘソといわれている位だから、丁度北海道の真中にあつて、スキ一の大会で有名な美しい町です。倉本さんは、もう、めちゃうくちゃに素敵な人で、いっぺんで好きになりました。僕はかつて、田中絹代さんと笠智衆さん主演の『幻の町』（TBS「日曜劇場」）という名作ドラマで初めて「倉本聰」という名前を知ったのですが、そういう感動の名作をものした大作家にお目にかかる、というだけで、初めドキドキしていました。気さくな方でしたし、千春と同じ次元で話のできる人ですから、相当許容量があつて、すぐになじんだ気にさせられました。倉本さんご自身のことについてや、千春の家に行った話は後に廻すとして、この時うかがった倉本さんを取りまく自然の話がすばらしいから、書きます。

先程、僕はヤモリに名前をつけて、などといいましたが、倉本さんもすぐ名前をつける人です。富良野の倉本宅近辺には、まだ時折熊が出るのだそうで、これは大変コワイ。熊も人間も丸顔の